

## 様式第 2 (第12条関係)

## 加入国際学術団体に関する調査票

## 1 国際学術団体活動状況 (内規第 11 条 活動報告)

団体名	和	国際社会科学会議
	英	International Social Science Council (略称 ISSC)
	団体 HP (URL)	http://www.worldsocialscience.org/ (日本学術会議が加盟していることの記載(有)・無)
国際学術団体における最近のトピックについて (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)		既存の分野を超えて、貧困、紛争、難民、地球環境の持続性、価値観の転換などに関心を持ち、社会のグローバルな構造転換を図る姿勢が鮮明である。過去 3 回の社会科学フォーラムでは、One Planet - Worlds Apart (2009), Social Transformation and the Digital Age (2013), Transforming Global Relations for a Just World (2015)を共通テーマとした。
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等について		国連による Sustainable Development Goals の理念とも連動し、持続可能な社会・開発のための capacity building を進める。Future Earth のメンバーでもあり、TD 研究者養成プログラムも組織している。
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて		日本は、学術会議として国際社会科学会議に入会してまだ日が浅いが、歴史的には日本人の理事が国際学会の推薦で選ばれたり、副会長を輩出したりしてきた。なお、世界社会科学フォーラム(WSSF)の2018年日本招致が確実である(次項参照)。
加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民への効果やメリットについて		<p>国際社会科学会議(ISSC)は、社会科学分野の国際学会や、各国の社会科学のアカデミーなどを主要なメンバーとして活動してきた。理事に主要な学会の会長クラスを擁し、分野別学術団体に対しても影響力を持つ。WSSFは、比較的最近始まったものであるが、現在ではISSCが独自で行う活動のなかではフラッグシップ的な役割を果たしている。</p> <p>また、ISSCは現在、国際科学会議(ICSU)との合同に向けて連携を緊密化させている。こうした文理融合の大きな動きのなかでISSCの活動に積極的に関わることは、国際学術団体全体の動向に対して日本の存在感を発揮することにつながり、日本学術会議にとっても、日本の社会科学関係の学会にとっても大きな意味がある。</p> <p>こうしたなかで、2014年から、第一部国際協力分科会のメンバーがWSSF第4回大会の日本招致に動き、2015年9月に開催されたWSSF第3回大会(南アフリカ)での理事会で日本との単独交渉に踏み込む方向が固まった。分科会は、2015年11月に、Future Earthの会合で来日したISSCの事務局長を福岡に招いて会場を見てもらい、東京で会議を開いてこちらの中心メンバーと議論を交わすとともに、日本学術会議に共同開催の申請を行った。この頃から、第一部部長だけでなく、花</p>

## 様式第 2 (第12条関係)

	<p>木副会長にもご尽力いただき、学術会議全体として招致を進めた。現在までに、この会議を 2018 年に福岡で開催することがほぼ確実な情勢である。</p> <p>WSSF は、国際的にはあくまで ISSC の会議である。国内では九州大学がホストとなり、日本学術会議および科学技術振興機構を共催団体とする、国内組織委員会によって運営される。2015 年末に、国際協力分科会においてこのことを決定し、同分科会のメンバーも参加して、国内組織委員会（委員長 青木玲子九州大学副学長・国際協力分科会副委員長）を、学術会議とは別の組織として立ちあげた。中心メンバーには、九州大学事務局を総括する宮本一夫九州大学副学長、内外の組織連携を担当する杉原薫政策研究大学院大学教授（国際協力分科会委員長・フェューチャー・アース推進委員会副委員長）、斎藤安彦日本大学教授（ISSC 理事）が加わった。</p> <p>国内組織委員会はすでに、WSSF のテーマの設定や、大会の組織、運営について、強いイニシアティブを発揮しつつある。国内委員会の主導で形成されつつあるコンソーシアムには、日本の大学、研究所、学会のほか、韓国、オーストラリアなどからも参加が見込まれている。前回同様、1000-1200 人規模の国際学会を想定しており、九州大学、福岡市、科学技術振興機構、日本学術会議などの資金援助の下に、21 世紀の世界に必要とされる広義の security（生存基盤：人間の安全保障などだけでなく、Future Earth の目指す環境の持続性を含む）とそれを支える価値観の創造を議論する予定である。WSSF の日本開催により、日本の学術の成果を世界の公論形成につなげるとともに、国際社会・アジアおよび日本の社会に対して、社会科学の価値、発信力を示すことができると考えられる。また、WSSF は伝統的に学術と社会・地域との交流を重視してきた。福岡大会でも地域との交流のための多くの企画が準備されつつある。</p> <p>以上のように、日本学術会議は、ISSC の加入団体として、WSSF の招致を主導してきた。開催についても共催団体として大きな貢献をすることになる。</p>
<p>その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など）</p>	<p>国際社会科学会議は、社会科学の主要分野の国際学会や、各国の社会科学のアカデミーなどを主要なメンバーとして活動してきた。理事には主要な社会科学分野の国際学術団体の会長クラスが入っているので、分野別団体に対しても一定の影響力を持っている。独自の活動も行っており、例えば、スウェーデン、ドイツ、イタリアの助成を得て、Networking Conferences for Young Scientist や World Social Science Fellows Programme といったプログラムを通して、若手研究者の育成と若手研究者間のネットワーク構築に尽力してきた。</p>

## 様式第2 (第12条関係)

## 2 今後の予定について (内規第11条 活動報告)

総会、理事会の日本開催の予定について (招致等の予定も含め)	2018年の第4回世界社会科学フォーラムの福岡開催に伴い、理事会、組織委員会が、福岡で開催される予定である。ただし、そのタイミングは、ICSUとの合同の進展状況を見ながら、決定されることになろう。
日本人の役員立候補等の予定について	次回の総会(2017年の見込み)において日本学術会議の代表を理事に推薦する予定である。
現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて	世界社会科学フォーラムの国内組織委員会(委員長 青木玲子(第23期会員))が、共通テーマや大会の組織、運営について、イニシアティブを発揮しつつある。Towards a New Regime of Security and Valuesをキーコンセプトとして提案。コンソーシアムには、日本の大学、研究所、学会のほか、韓国、オーストラリアなどからも参加が見込まれている。

## 3 国際学術団体会議開催状況 (内規第11条 活動報告)

総会・理事会・各種委員会等の状況 (過去5年間及び今後予定されているもの)	総会開催状況	2010年(開催地:名古屋)、2013年(開催地:モントリオール)、2016年(開催地:オスロ)、 年(開催地: )		
	理事会・役員会等開催状況	2010年(開催地:名古屋)、 2011年(開催地:北京)、2012年(開催地:モントリオール)、2013年(開催地:ロンドン)、2013年(開催地:モントリオール)、2014年(開催地:パリ)、2015年(開催地:パリ)、 2016年(開催地:オスロ)、2018年(開催地:福岡)、		
	各種委員会開催状況	年(開催地: )、 年(開催地: )、 年(開催地: )、 年(開催地: )、 年(開催地: )、 年(開催地: )、 年(開催地: )、 年(開催地: )		
	研究集会・会議等開催状況 (世界社会科学フォーラム)	2013年(開催地:モントリオール)、2015年(開催地:ダーバン)、2018年(開催地:福岡 )、 年(開催地: )、 年(開催地: )、 年(開催地: )、 年(開催地: )、 年(開催地: )、 年(開催地: )、 年(開催地: )		
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定	理事会(2010年~2013年まで2人、2013年以降1人) 世界社会科学フォーラム(2009年ベルゲン:3人[公式参加のみ:代表派遣なし]、2013年モントリオール:7人[代表派遣1名]、2015年ダーバン:2人[いずれも代表派遣]、2018年福岡:300人目標)			
国際学術団体における日本人の役員等への就	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別
	副会長	2010~2013	児玉克也	(22期) 会員・ <b>連携</b>

## 様式第2 (第12条関係)

任状況 (過去5年)	理事	2010～2016	齋藤安彦	(23期) 会員 <b>連携</b>
		～		( 期) 会員・連携
		～		( 期) 会員・連携
		～		( 期) 会員・連携
		～		( 期) 会員・連携
		～		( 期) 会員・連携
出版物	1 定期的 (年 回) 主な出版物名 2 不定期 ( 3回 ) 主な出版物名 World Social Science Report			
活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載 ( <a href="http://www.worldsocialscience.org/activities/">http://www.worldsocialscience.org/activities/</a> )				

## 様式第2 (第12条関係)

## 4 国際学術団体に関する基礎的事項 (内規第3条、4条、5条)

国内委員会 (内規4条第3号)	委員会名	第一部国際協力分科会
	委員長名	杉原 薫
	当期の活動状況	(開催日時 主な審議事項等) 第1回: 2014年12月26日(金) 第2回: 2015年1月31日(土) 第3回: 2015年7月11日(土) 第4回: 2015年10月(メール審議) 第5回: 2015年11月8日(日) 第6回: 2015年11月23日(月) 第7回: 2016年4月15日(金)
内規第3 (国際学術団体の要件関係)	国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である 1. <input checked="" type="radio"/> 該当する      2. <input type="radio"/> 該当しない ※根拠となる定款・規程等の添付又はURLを記載 ( <a href="http://www.worldsocialscience.org/documents/issc-constitution-revised-by-the-xxviiith-ga.pdf">http://www.worldsocialscience.org/documents/issc-constitution-revised-by-the-xxviiith-ga.pdf</a> )	
	各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている(主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か) 1. <input checked="" type="radio"/> 該当する      2. <input type="radio"/> 該当しない ※根拠となる資料の添付又はURLを記載 ( <a href="http://www.">http://www.</a> )	
	下記の事項(ア～エ)のいずれか一つに該当するか(該当するものに○印)	
	ア 個々の学術の専門分野における統一かつ世界的な組織を有するもの	
	イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一かつ世界的な組織を有するもの	
	ウ <input checked="" type="radio"/> 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの	
	エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの	
10 カ国を超える各国代表会員が加入している 1. <input checked="" type="radio"/> 該当する      2. <input type="radio"/> 該当しない		
加入国数及び 主要な各国代 表会員を 10 記載	(25ヶ国) ・各国代表会員名/国名 イギリス・オランダ・ノルウェー・カナダ・メキシコ・インド・中国・ 韓国・フィリピン・ドイツ	